

“春”(chūn)と“夏”(xià)

法学部
鄭 高咏

春に萌え出した初々しい緑が、夏に向けて日に日に鮮やかになってきた。そこで今回は“春”と“夏”、この二つの漢字の成り立ちをたどってみることにしよう。

“春”の字源は甲骨文字にさかのぼることができる。最古の“春”の字(図)の左下に描かれているのは、地表に顔を出したばかりの新芽であるが、実はこの新芽自体、“屯”(zhūn)という一つの漢字であり、後漢の許慎が撰じた字書、『説文解字』は“屯”について、“屯、難也、像草木之初生屯然而难。”(屯とは難である。萌え始めた草木がかがまって苦しむ様をかたどっている)と述べている。つまり“屯”の字は地面(上の横棒)を突き破って生え出した1本の草の象形で、その根元が曲がっているのは、ようやく芽吹いた春の草木が、さらに伸びようとして必死にもがいている様を表しているというのである。この字を作り出した古代人たちは、小さな芽が地面から頭をのぞかせたころの姿を描写して春を表現しようとしたに違いない。また甲骨文には春の意味で“屯”の字を使っている記述がいくつか見られ、一例を

挙げれば、“壬子、^{みずのえね}貞今屯受年九月”(壬子の年、今年の春の作柄を占ったところ、9月に豊かな実りが得られると出た)という占いの記録があるが、この“今屯”は「今春」、「受年」は「豊作」のことである。甲骨文字以降、文字が統一されるまでに“春”には様々な異体字が作られ、書き方も時を追うごとに複雑になっていったが、いずれの“春”の字にも共通する特徴が二つあった。まず一つは“屯”で音を表していたことであり、これは甲骨文字、金文(図)、小篆(図)でも変わらない。もう一つは「草木」と「日」を組み合わせていた点で、この二つで草むらや木々の間から悠然と昇り来る太陽を表現し、暖かな春の日差しを象徴していたのである。

やがて秦の始皇帝の時代になると隷書が登場する。隷書は程邈^{ていぱく}なる人物が10年にわたる試行錯誤の末に考案したとされるが、この新しい書体では篆書の曲線的な要素が一切排されたため、漢字ははるかに簡便で書きやすくなった。その違いは“春”の下の“日”の字を見ても明らかで、小篆のそれは楕円形だが、隷書(図)ではシャープになっており、格段の進歩を遂げている。隷書の出現は古文(隷書以前の文字)と今文(隷書)の分水嶺となり、これを境に原始的な象形文字の記号化が始まった。この漢字の篆書から隷書への一大転換を“隶变”という。“隶变”を経た隷書の“春”の字にはもはや大きな変化は見られず、楷書(図)の“春”と比べても違いはほとんどない。

“春”は「四季の最初の季節」を表す字でもあり、中国では春の訪れ、つまり新しい年の始まりを旧暦の元旦に祝うが、この中国のお正月を“春节”という。「春の節気」という意味を持つ“春节”は中国人にとって年間最大のイベント、



図
(甲骨文字)



図
(金文)



図
(小篆)



図
(隷書)



図
(楷書)

最高の晴れの日であり、どこの家庭でも新年のお祝いをして、今年もいいことがありますようにと祈る。“春節”になくなくてはならないのが、門口の両側に貼る赤い紙、“春联”であり、新春にちなんだ文句が書かれていることから“春联”の名がある。ここで代表的な“春联”の文句を紹介しよう。まず“有天皆雨日，无地不春风”、これは、澄み渡った空からうららかな日差しが降り注ぎ、息を吹き返した大地に春風があまねく吹き渡る、という意味である。名句として知られる“一元复始，万象更新”には、年が改まって何もかもがまた一から始まり、森羅万象が新たな人生と発展を手にする、という意味が込められている。“三阳开泰，六合同春”は、新春が到来し、世界中が春の息吹と生気で満ち満ちる様を表したおめでたい言葉である。これらを見ても分かる通り、“春联”の言葉は必ず対句になっていて、門口の右側に貼る“上联”に前の句、左側に貼る“和選”に後の句を書き付ける。この“春联”とよく似たものに、縁起の良い語句が書かれた赤い紙、“春条”がある。“春条”もまた新春を祝うためのものだが、“春联”と違うところは、“春条”の言葉は中国人にはおなじみの、ごく身近なものであり、さらに対句でなくても、左右一対でなくても構わないので、どこにでも気軽に貼れる。この親しみやすさから“春条”は引っ張りだこで、家の中といわず外といわず、そこらじゅうにべたべた貼り付ける。このほか、“福”の字を書いて貼るのも“春節”の風物詩だが、この“福”の字は逆さまに貼るのが味噌で、その意味するところは“福到了”(fú dào le「福が来た」)、つまり“福倒了”(fú dào le「福が引っ繰り返った’)と語呂合わせになっているのである。

さて、春の話はこれぐらいにして、今度は夏について触れよう。

前述したように、甲骨文字に“春”はあるが、意外なことに“夏”はない。これは恐らく、古代人たちが季節を大づかみに捉えていたことによるものと思われる。そのころの最大の関心事は、何といっても年に2回訪れる夏と秋の収穫であり、

甲骨文字で書かれた占いの記録に“春”と“秋”の2字が出てくれば、それはまず間違いなく農業関連の記事であるという。専門家はこのことを根拠に、今から3500年前の殷代にはまだ季節は四つに分けられておらず、春と秋の区別があっただけで、春は夏の収穫を中心とした季節、秋は今日でいう秋と冬を合わせた季節であった、と考察しており、これに従うなら、季節を表す“夏”、“冬”の字が登場したのはもっと後ということになる。さらに“夏”の字には特筆すべき点がある。それは、“夏”が元々古代中国の王朝名であったことで、この王朝とは伝説上の聖王、禹が開いた“夏”であるが、後に“夏”は夏王朝のみならず、中国全体を指すようになった。すなわち中国の古称、“华夏”(華夏)の“夏”であり、いにしへの中国人は自分たちを“夏”と呼んでいた。中国最古の辞書である『爾雅』の『釈天』篇は“四时”(四季)という項目から始まり、そこには四季の特徴、固有名詞、別名などと共に、“夏”の語釈も記されている。いわく、“夏为昊天”(夏とは大空である)、“夏为朱明”(夏とは気が赤く輝くことをいう)、“夏为长(zhǎng) 贏(yíng)”(夏とは増え、満ちあふれることである)。ここで用いられている“夏”は、春と秋の間の季節を表すために古代王朝の名、“夏”を当てた「仮借(かしゃ(六書の一つ。ある語を表す漢字がない場合、意味に関係なく、同音の既成の漢字を借りて表現する方法))」と考えられる。

とりわけ日が長い夏は、気温、日当たりとも植物にとっては最良の時期といえ、草木はすくすくと葉を広げ、ぐんぐんと枝を伸ばす。そう、夏は繁茂の季節であり、戦国時代の詩人、屈原も『九章・懐沙』の中で、“滔滔孟夏兮，草木莽莽”(はつらつたる初夏、辺り一面に草木が生い茂る)と詠んでいる。また“夏”には「大きい」という



意味もあり、『詩経・秦風・權輿』に“于我乎夏屋渠渠，今也每食无余”（先王様のありがたい思し召しのおかげで私は大層大きな屋敷に住んでいるが、近ごろでは禄が減り、何とか暮らしているといった有様だ）とあるが、この文中の“夏屋”は「大邸宅」のことである。

この通り、“春”も“夏”も、その成り立ちを振り返ってみると、緑の香りがぷんと立ち上がってくる。草萌える春、木茂れる夏、この生气あふれる季節を表すのにこれ以上ふさわしい字はあるまい。

含笑花

経営学部
矢田 博士

草解忘憂憂底事

花能含笑笑何人

草は解く憂いを忘るも
底事なにごとをか憂えん

花は能く笑みを含むも
何人なんびとをか笑わん



丁謂（九六六～一〇三七）、^{あざな}字は謂之（後に公言と改める）、長洲（今の江蘇省呉県）出身の人。北宋の第三代皇帝・真宗の時に主に活躍し、宰相の地位にまで昇った。しかし、第四代皇帝・仁宗の時に、罪を得て崖州（今の海南省崖県）に左遷され、晩年をその地で過ごした。

冒頭に挙げた二句は、彼の「山居」と題する七言律詩の頸聯の二句である。丁謂自身が施した注に「海南に含笑花有り」とあることから、「山居」という詩は彼が海南島に左遷されていた時期の作と判断される。とりわけ頸聯のこの二句は、北宋の当時において早くも高い評価を得ていたらしく、例えば北宋・司馬光の『温公続詩話』に、

丁相謂 善く詩を為る。珠崖に在りても猶お詩有り、百篇に近し。『知命集』と号す。其の警句に「草は解く……、花は能く……」なるもの有り。

といった記述が見られることや、北宋・釈惠洪もまた『冷齋夜話』巻五の中でこの二句を引用したうえで、「世 以って工と為す。」と述べていることなどからも、その点が窺えるであろう。

さて、当該の二句には「忘憂草」と「含笑花」といった二つの植物が詠み込まれている。「忘憂草」は「萱草けんそう（諛草）」とも言い、この草を植えて玩味すれば、人の憂いを忘れさせることができると言われることから、その名がある。また、例えば「焉にか諛草を得て、言に之を背に樹えん」（『詩経』衛風・伯兮）や「懐ふところに忘憂草を挟む」（劉宋・劉義恭「遊子移」）、「萱草 解く憂いを忘る」（唐・白居易「酬夢得比萱草見贈」）など、古くから詩の中にも詠み込まれている。

ところが一方の「含笑花」については、唐代以前の詩に詠み込まれた例を私は寡聞にして知らない。試みに「故宮【寒泉】古典文献全文検索資料庫」の「全唐詩全文検索」によって、「含笑」という語の用例を調べてみたところ、人の微笑むさまを形容したものが圧倒的に多く、花が開き始めるさまを形容する例もわずかに見られるものの、